

地域の学校の学級のことを何て呼ばばいいんでしょう？今回は通常という言葉を使いました。
普通・・・ほかの学級は普通じゃないの？ 通常・・・ほかの学級は異常なのか？と悩みます。

この報告は、昨年度まで勤務していた志摩市立成基小学校での実践です。成基小学校は、志摩市の学校再編計画により4月から近隣の学校と統合し、磯部小学校となりました。昨年度の全校児童数は27名、3個複式の小規模校でした。学校の歴史は古く、閉校の年には創立140年を迎えました。校区は、面積も狭く、人も少なく、人と人の関係が濃いところです。保護者と信頼関係を築くことができれば、とても過ごしやすいところですが、気持ちが行違うと修復はとても難しく、子どもたちの指導も難しくなります。教育相談や発達検査についても、学校から勧めるのは慎重にならざるを得ません。

1、もやもやしているより、相談 「平仮名をこんなに間違えるのはなぜ？」

3年生で担任したAは、運動が得意でリーダーシップのとれる、一言でいうと明朗快活な男の子だった。1年生、2年生と5人学級で学習してきた、3年時から4年生5人との複式学級となった。国語と算数は、2年間5人だけで単式で学習してきたので、基本的なことは身につけていた。ただ、1・2年生担任より引き継いだのが、平仮名表記の間違いの多さと、「ハクチョウを見て『ウサギ』といったことがある」ということだった。他にもはっきり覚えていないけど、「普通、そんなこと間違わないだろう」と思うような間違いがあったということだった。「音がちゃんと聞こえているのか、調べてもらった方がいいのかもしれないと思いながら、2年間過ぎてしまった。平仮名表記の間違いは、保護者も知っている。」との言葉に、もやもやした思いを持ちながらも、正面から向き合えなかった担任と保護者の様子が窺えた。

そこで、毎日の日記の中で表記のおかしなところを書き出していく作業を続けた。

おしえて→ましてて おもいました→まもいました おこなう→まこなう よわき→よはき
わかった→はかった たなばた→たなわた しょうわ→しょうは

「は」か「わ」かは、授業中にもよく訊かれた。

かいてん→はいてん ちよくせん→しよくせん こけそう→これそう
ぎょうれつ→ぎょうけつ なりました→なりました おにごっこ→おにごこ
やきゅう→やくゅう やっきよく→やっきょう しゃしん→しょしん
たいいくかん→たいくくかん

文字の形は、「く」と「ん」、「く」と「し」、「ひ」「や」「わ・れ・ね」が区別がつきにくかった。漢字に読み仮名をつけさせると、「畑 たんぼ」「夏 はる」「妹・兄 おとうと」「西 みなみ」と、ジャンルはあっているが、読みは間違っているものがあった。「代表委員会 だいようひんかい」「栗木広 くりひろき」という間違いもあったし、表記だけでなく、発音も間違えているかなと思われるところもあった。「野鼠→ののずみ」「こうへい→こうえい」「一緒→いちよ」「難しい→すずかしい」「チーム→チーヌ」

また、文章が読めないのは、どんな程度なのかということも国語の時間を中心にみていった。すると、漢字が読めないことがわかってきた。季節を表す漢字は、たとえば「夏」のときには、「なつ」と読めることもあるが、「はる」「あき」などということもあった。また、文章を読むときに、区切る位置がおかしいこともわかった。句読点がないとどこで文を区切るのか分からないようで、語彙が乏しいのかと思った。最初は、自分で読めなくても人の音読を聞いているうちに読めるようになってくるし、漢字も練習をすると読み書きできるようになるので、単元ごとのテストではそこそこの点数を取ることができていた。

毎日の記録をもとにして保護者と話し合い、耳(聴覚)の検査を受けることにしたが、耳鼻科に行く前に、市の発達相談を利用することにした。人の音読を聞いて正しい音読ができるようになっていくのだから、聞こえ方以外にも原因があるのではないかと思い、他の検査も受けてみようということになった。保護者は、「耳?もしかしたら頭?」と言いながらも真剣に考えてくれた。学校の支援教育コーディネーターが窓口となり、市の相談室と保護者を繋ぎ、夏休みに発達検査を受けることになった。発達検査を受けて学校に報告に来てくれた保護者の第一声は、「耳と違った。目だった。」意味が分からないでいると、「耳はちゃん聞こえているし、声に出す音も正しい。でも、字の形が分からないみたい。」と言葉を足してくれた。その後、市から学校にも結果が届き支援の仕方でも教えてもらった。何が苦手なことなのかははっきりして支援の仕方でも教えてもらったのだから、あとは普通の授業の中で気を付けるようにしていった。小さな学校なのでAに関わるのはすべての教師なので、検査の時の様子と支援の仕方については全員に知らせた。(別紙)

支援の仕方に書いてある「ゆっくりとした口調で話しかける」や「支持は具体的にする」など、教師として当たり前のことが足りなくて、Aの学習を困難にしていたのだと反省した。ビジョントレーニングについては、特にトレーニングとしてではなく、国語の授業で板書を利用して同じ文字を探したり、文章のさかさま読みをしたりしていった。1年4か月後の検査では、前回苦手であったところが伸び、得意不得意の部分もなだらかになったのでほっとした。

聞こえが問題かと思っていたのが、そうではなくて形をとらえるのが苦手ということが分かり、「耳から入る情報が理解を助けている」ということが分かったので、国語だけでなく他の教科でも、音読することを大事に授業していった。抽象的な言葉などは、一緒に学習している上の学年の子どもたちに説明してもらうこともあったし、文章がうまく読めないときには、代わりに読んでもらうこともあった。社会科の授業で圃場整備の学習をした時には、記念碑に書かれた後継者を求める文を上の子が読んだら、「ぼくらがやればいいんや」と、その意をくみ取っていた。

発達検査を受け受けるときに本人に伝えたことは、「3年生になったのに、平仮名を間違えることがあるのはどうしてなのか調べてもらって、間違えないようにする方法を考えるため。もし、耳の聞こえ方が悪かったら、耳鼻科に行って検査してもらうため。」と伝えた。結果については、「耳はちゃんと聞こえている。なぜ間違えるかという、形をちゃんと見るのが苦手だから。慌てないで、ゆっくりするようにしたら、間違いはな

くなる。」と伝えた。その後、Aと私の合言葉は、「あわてない、あわてない」「ゆっくり丁寧に」になった。スポーツマンで「スピードが大事」だったのが、勉強はゆっくりになって字を丁寧に書くようになったら平仮名の間違いも読み間違いも減った。保護者も、「私も早口だったから、知らない言葉は適当に聞いていたと思う。ゆっくり言うようにする。」と言っていた。でも、大好きなラグビーの言葉は、難しい言葉でも理解できているし、言い間違えたり書き間違えたりしない。やっぱり一番は興味関心。

2 親子関係がうまくいってない？～育て方が悪いのではないですよ～

「子どものことがかわいいと思えない。」「迷子になっても平気であるので、私がいなくてもいいのかと思ってしまう。」「自分が子どもの時に嫌いだった子に似たことをする。」など、Bの家庭訪問の時に母親から聞かされたのは、母親なら、自分の子どもがかわいいはずなのに、そう思えないことの罪悪感と、自分の想像を超えた行動をする子どもへの不満と不安だった。

学校では、学習面で躓いていた。平仮名が覚えられない。曲線がうまく書けないし、文字の読み方を覚えることができなかった。算数でも、数字と数の結びつきが弱く、1・2・3と順に数えないと数が言えないし、具体物は分解することができても数字になるとできなかった。5個あるおはじきを2個と3個に分けることはできても、5は2と3とはならない。1年生の1学期から夏休みの補習決定だった。生活面では、上の学年の子どもとトラブルになることが多かった。少し刺激すると、過剰に反応するので、からかわれるようなところもあった。

保護者との話し合いで、学校での支援の仕方を探るために、発達相談を受けさせて欲しいということを切り出したら、保護者の方も考えていたということを知ってくれた。そして、過去の検診で、「少し心配だけど、様子を見ましょう。」と言われ続けてきたことも話してくれた。

相談の日、結果を聞きながら母親は泣いていた。心理士と市の職員から「よく、ここまで育ててきたね。やりにくかったでしょう。」とそれまでの子育てをねぎらわれたときに、涙が出て、止まらなくなったようだった。知的レベルは標準といわれる範囲だったが、各指標間の差があり、社会的な行動や日常の常識的な行動は、意識して教えていかなければならないという。「これぐらい分かるはず、これぐらいできるはず。」が通用しないということ。迷子になったら、不安になって親を探すだろうという親の思いこみは、通じないのだという。ぱっと思いついたことをする、例えば使いたいと思ったら、自分のものでなくても使ってしまうことなど、子どもとはいえ常識では許されないことをやってしまいがちだし、大人は「そんなことは言わなくてもわかっているだろう」と思っただけなのだとされた。母親は、自分の育て方が悪かったのではないと言われると同時に支援の仕方を教えてもらったので、「相談に行ってもよかった」と、発達相談を好意的に受け止め、次にもつなげていくことができた。

家庭と学校で共有したのは、その日の生活の中でいつもと違う場面があるときには、事前に「こうはしないで、こんなふうにして。」と子どもに言うこと。学校では、「いやなことがあってもけんかしないで、教室に戻っておいで」と約束した。一番トラブル

が多かった上級生には、「この線から中に入るときは、先生の許可を得てから」と話し、教室を安全地帯として確保した。からかわれたりしたときは、大人に話すようになり、トラブルは激減した。上級生もまた、具体的な支援が必要な子どもだった。

生活面で落ち着きが出てくると、学習も進むようになってきた。居残り勉強や長期休業中の補習は相変わらずあるけれど、嫌がらずにやるし、15~30分の集中が続くようになってきた。2年生の時のかけ算九九が覚えられなかったので、3年生のわり算で苦労した。余りのないわり算は、何とかあったけれど余りがあるとお手上げ状態だった。それが、3年生ももうすぐ終わろうかというときになってやっと九九が言えるようになったので、続いて余りのあるわり算に挑戦した。やり残したドリルを引っ張り出して $19 \div 3$ を考えたとき、19 は3の段にはないと言いながら、 3×6 の答えに近いことが分かった。このとき、「とりあえず6」という言葉が出てきた。そうして $19 - 18$ をして1残るということが分かった。「とりあえず」がキーワードとなり、仮商を立てることができるようになって後は一週間で3年生のわり算の範囲を勉強しなおすことができた。修了式の前々日まで、居残りを厭わず「なんかできる！」とがんばった。また、保護者も毎日学校まで迎えに来てくれた。ゆっくり分かるようになる子がいると改めて感じさせられた。

3 複式学級の中で

報告させてもらっている子どもたちは3・4年生を複式学級で過ごしています。Bの報告の中に出てくる上級生については、学校と保護者の関係がうまくいかず、発達検査は受けていない。しかし、年に数回来てくれる巡回相談とスクールカウンセラー(月3)に、観察してもらって、対応を考えていった。保護者には、本人の苦手だと思われるところを伝えて、学校全体を見てもらう中で観察してもらうことを伝えた。そして、もらったアドバイスについて学校と家庭で共有するようにした。学校では、

- ・初めてのことに對する丁寧な事前説明と、具体的な動き方。
- ・授業中や学校での過ごし方の分かりやすい約束。

チャイムに合わせて動く。

授業中は座っている。動くときには、先生に事前に知らせる。

人を殴らない、けららない。

乱暴な言葉を使わない。

等を約束した。そして、複式学級の上の学年であることから、「4年生にはわかっていることと思うけど、3年生は分からないところがあるから・・・」と切り出して、事前に注意すべきことを言い、「・・・4年生が、3年生を見てね。注意してね。」と結ぶようにした。そして、小刻みに「さすが4年生」と言葉をかけていった。4年生全員がいい動きをするようになった。さらに、3・4年生が同じ内容を学習する時には、何かを読むのは4年生ということにして、Aの理解を助けるようにした。大変なことも多い複式学級であるが、学年が違うということを利用することもできる。

4 保護者と同じ方向を

発達相談を勧めるとき、学校が困っていることや、大人が困っていることではなくて、子どもが困っていることの原因や、支援の方法を探るという姿勢で保護者と話をしていくことが重要だと考える。特に支援の方法については、いくつか例を挙げて説明し、この方法でやりたいと思うのだが果たしてそれでいいかどうか迷っているので、判断するために発達検査を受けてほしいと伝えた時が、保護者の同意が得られた。A の場合は、学習内容の理解のために視覚支援が必要かと思っていたのが、そうではなく耳で得られる情報の方が必要だということが分かった。もやもやと悩んでいたこともあって、保護者も検査を受けたことを好意的に受け止めてくれた。

同じ学校の中でも、一度失敗したために、保護者が相談を拒むこともあった。特に、学力に課題がないと、保護者は発達相談の必要性を感じていないようである。「家の子に、『障がい』のレッテルを貼るのか。」という言葉が返された同僚もいる。発達相談＝障がい＝特別支援のように感じられるのだろうと思う。今までの特別支援教育のなかで出来上がったイメージなのかと感じる。そのイメージを払しょくしたいのはもちろんだが、そんなときに利用したのが、スクールカウンセラーと巡回相談だった。スクールカウンセラーや巡回相談の方に子どもの様子を見てもらい、支援の必要なところと、支援方法を相談してから保護者と話し合った。「学校で、こんなところに気を付けて見ていきます。」と話す、「家でも気になっていたんです。」とか「家でもやってみる。」と好意的に受け止められることが多かったです。保護者も悩みながら本音を出せなかったのかと思った。「こんなことで困っている」ではなくて、「こうしたいと思う。」と学校が動く姿勢を見せることが必要だと思っている。案外保護者は待っているのかもしれない。